

かみ しも
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡(本発掘調査B)

所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度06分50秒 東経137度34分03秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和元年5月～令和元年9月

調査面積 3,600㎡

担当者 酒井俊彦・永井宏幸・宮腰健司



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 本年度の発掘調査は、平成28年度本発掘調査A(範囲確認調査)の成果を踏まえて設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

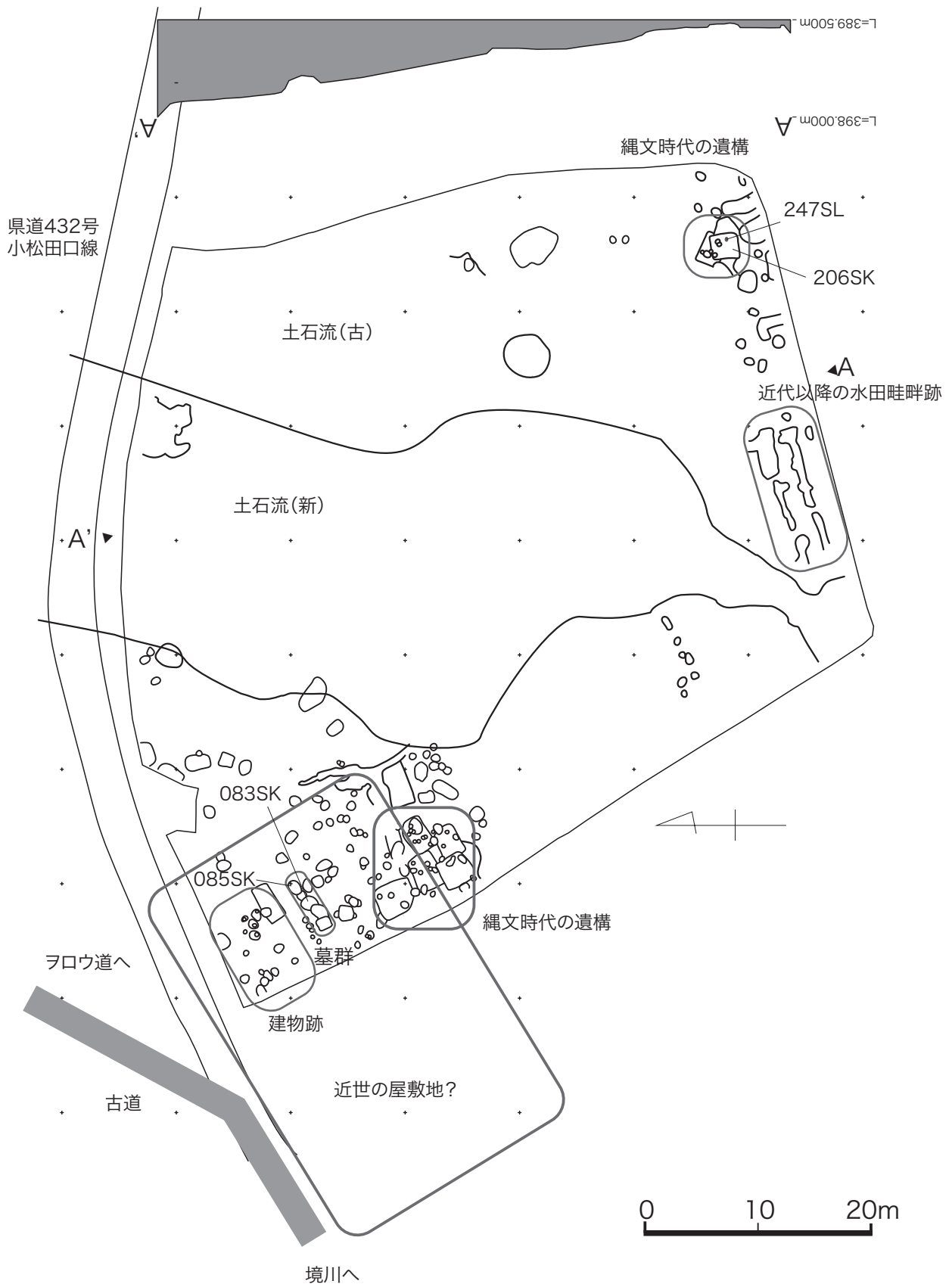
立地と環境 遺跡は、豊川水系境川右岸の河岸段丘から山地へ上がる緩斜面に立地する。今回の調査区での比高差は8.5mある。隣接する周辺の遺跡としては、遺跡の上流に石原遺跡、下流に万瀬遺跡、境川を挟んで対岸に笹平遺跡がある。今年度の発掘調査は、遺跡の中央を横断する県道432号小松田口線の南側境川寄りを行った。

調査の概要 遺跡の現況は、農地として利用されていた。片麻岩を高いところでは2m以上積み、緩斜面に数段の平坦面が造成されていた。この造成に関わる表土を除去すると調査区中央におびただしい砂礫層を含む土石流が展開する。土石流の時期は限定できないが、土石流の影響の及ばないところに縄文時代晩期を中心とする遺構群、江戸時代後半の遺構群が確認された。

江戸時代後半の屋敷地と考えられる遺構は、調査区北西寄りに展開し、県道に隣接して建物跡と思われる柱穴を5基以上確認した。柱間を推定できるような配置は確認できなかったものの、建物跡を構成する柱穴に、柱痕跡を断面確認した遺構が5基程度あった。これら柱穴の南側を東西方向に並列し、1m四方、深さ0.5m前後の不定形な土坑を5基確認した。これらのうち、東端の土坑085SKから広東碗と煙管、中央の土坑083SKから皮革で包んだ煙管が出土した。土坑群のうち2ヶ所から副葬品に相応しい遺物が出土したことと、座葬を想定できる土坑の規模であったことから、人骨などは確認できなかったが墓墳と考えられる。また、これら江戸時代の遺構群の南東隅に逆L字状の溝を確認した。おそらく屋敷地を囲む溝として配置されていたと思われる。なお、この溝の上位には拳大前後の礫が埋設されていた。江戸時代の遺構群は、県道を挟んで遺跡の南西から北西に向かって延びる道が元文元(1736)年作成の川向村絵図に記載されており、この道沿いの屋敷地と考えられる。

江戸時代の遺構群に南接して2m四方前後の方形遺構を5基程度確認した。出土遺物は縄文時代中期から晩期、弥生前期におよぶ土器、石器がある。遺構は明確に輪郭が確認できたものの、掘りかたは不明瞭であった。その理由としては、遺構埋土の土質が基盤層と明瞭に分層できなかったことにある。

調査区南東寄りに縄文時代晩期を中心とする2～3m前後の方形遺構を5基前後確認した。調査区北西寄りの方形遺構群とは異なり、複雑に重なって確認された。全てが竪穴建物かは確定できなかったが、プランのほぼ中央に焼土と炭化物を伴う石囲炉247SLを付設する206SKは、長軸2.9m、短軸1.8mを測る方形の竪穴建物である。(永井宏幸)



遺構全体図 (S=1/500)